

題材「ラス・メニーナス～宮廷の侍女たち～の鑑賞」実践におけるワークシートの分析
—中学3年生の場合—

立原慶一

鑑賞体験をめぐっては中学校学習指導要領美術編[2・3学年] B鑑賞(1)の「ア」で、「造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能との調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと」と記され、美術史や芸術学のダイジェスト版などではなく、一定の鑑賞教育観が打ち出されている。

まず作品の「よさや美しさ」としての美的特性を感受し、それを前提として作品の主題である「作者の心情や意図」を感性的に把握するべきなのである。主題は生活感情及び世界観（本題材の場合、より詳細には「人間観」が対象となる）的な内容がワン・センテンスとしてありながら、直観的に把握されるべきものである。このように「ア」からは鑑賞体験の基本、並びにそれを踏まえて鑑賞能力の本質を把握しよう、との意図が感じ取れる。

こうした学習指導要領の趣旨に沿ってありうべき鑑賞体験と、育成すべき鑑賞能力が明確にされるが、それに基づいて授業を行う。2クラス78人の生徒がその中で書いた、鑑賞ワークシートをすべて検討してみる。鑑賞体験の様相と鑑賞能力はそこにどのような形で現れるのだろうか。

それらを分析するための切り口として、本稿では美的特性の感受と主題の感受を提起したい。その観点から、二種類の感受活動が達成されたのかどうかによって、ワークシートを能力別に類型化する。その序列化を基準に据えながら、各類型における美的特性の感受と主題感受の様態、両者の関係について調べてみる。本題材における鑑賞体験の特質と能力的特徴を明らかにするために、研究方法論として関係の構造化と数値化という手続きを採用する。

本題材実践で生徒はまず、作品に対する第一印象としての美的特性を感受する。その後の鑑賞活動で、造形法のあり方を深く見つめ理性的の働きによって、表現方法的な価値を突き止めることになる。鑑賞体験の特質として明らかとなったのは、その過程で期待される新たな美的特性の感受が、主題把握を有効に導くことである。

鑑賞能力を評価するために、どのような指標が新たに見出されたのであろうか。「作者の自己像」という主題は78人中56名、71.8%の生徒が感受した主要なものだが、その中で両義的な価値感情を把握した生徒は第一類型（全五類型中最上位）で28.6%、第二類型（同第二位）で24.0%いることが認められた。その達成は鑑賞能力をより正確に評価するための、指標となりえることが分かった。

質問事項「③作品の色使いや構図に注目してみよう」の「(2)空間構成、構図」に対して、第一類型では約3割、第二類型では約1割強の者が空間構成法及び構図法的な価値を突き止める過程で、「姫の偉大さ（趣味特性）」「怖い（感情特性）」「優しく見守っている感じ（行為特性）」など美的特性を感受できた。この調査項目によって、生徒のさらに高度な鑑賞能力を測定できることが明らかとなった。